曲静堂雑録

文化四卯年分
文政十二丑年迄 三

内閣文庫
番號 和 35580
冊數 23(3)
函號 151 38

内閣文庫
和書 類
三五五八〇 號
二三 冊
一五一 函 六 架

文化四卯年ゟ文政十二丑年迄目録

文公様ゟ盲子え被下　御学之事
文化四卯年搬実地験効之事
武公様ニ入部之事
文化八未年正月学問之表達之事
文化十酉年盲人渡世之安堵之事
文化十二年盲子之家督之達之事
文化十一戌年多子之出生之達之事
文化十三子閏八月　武公様御逝去之事
文化十五寅年盲子之家督之達之事

文化十五年寅五月一分判吹立ニ達之事
寅五月年号改元之事
右分通用ニ達之事
文政元寅年異船浦賀ニ来着之事
文政二卯年京算書替ニ達之事
諸役所向ニ人減ニ達之事
諸向以割ニ減ニ達之事
金銀引替之文字ニ納之事
拝借金家ニ而引移表屋敷上ケニ達之事
小判金并壱分判吹替之上ニ真味合ニ諭ニ達之事
文政二卯年琉球船川尻村浦ニ漂着之事
文政四年巳六月琉船漂着之事
大久保殿家来漂舟説打之事
文政四巳年異国船沖中出之事
文政六未年異国船沖合ニ見へ候事
弐朱金通用之事
文政七申年異国船漂来之事
文政七申年異国船之文字　宮公様ゟ教諭之事
文政七申年エケレス人薩州宝嶋狼藉之事
大久保加賀守殿ゟ林肥後守ニ異船漂来之節取計方写之事

文政八酉年四月呉服町手摺之者共乞ニ罷出候事
安田喜三郎旗本ゟ被下候彼ノ致方ニ乞ニ罷出候事
大久保今助ゟ水戸へ證文之事
佐藤大保監物之事
文政十一子年越後国大地震之事
御書物奉行より橋(?)他(?)を以御尋ニ付江戸表ゟ申来候写事
肥前長崎大風之事
松平肥前守居所地大風事
哀公様ニ大病ニ付御継子之義ニ付家中江戸表へ罷登候事
敬三郎様御相続之事

文公様ゟ育子之儀ニ付　御筆之事

御筆之写

育子之事ニ付而ハ去ル寅年ゟ　御先代ゟ追々仰出されも有之
家中先年上国之節出生之子共迄も通(?)生れ候子供まひく
と云ふ事天道ニ悖れ人之子を捨むく事誠ニ哀むへき
事且又他国之聞ニも甚恥入候事也それ故町方郡方
役人共も厚く申渡しハ有之候へとも猶下々ニおゐ
て第一不届之次第ニ候郷村ニ而も大ニ減し候
扶持人ハ分ニ困窮之為家中ニ而も其困窮之事
又ハ第一其風義宜しからず町方村々ニ而空家抔も有

家中ニ而も夫々ニ至ル迄急度心を付置候様ニ申渡持なと
も右騒動之儀ニ付帰郷之面々村役人共ニ而
為致も家業も其筋之申合ニ付其旨日夜書付を以相達ス
中嶋土地向端々迄一統右之騒動之節ニ付紙以申し
度ニ事

文化四卯年蝦夷地騒動之事
享和三亥年
九月

東蝦夷地所々ニ而ヲロシヤ人渡来乱妨仕諸会所番人共ヘ大砲を
打懸候而所々を盗取剰焼払申候ニ付涼山大平役所ヘヲロシヤ
ヤと出候ニ而も其上津軽南部之人数三百人余差遣し申候ニ付并

冬之事ニ而渡海之節ニ成候得共南四月ニ相成申候ヲロシヤ船大きサ一万石程
積候様ニ而乗人数五百人程ニ而候大筒三十挺程相備候様ニ相見候由ニ而
之船今以沖ニ見ヘ申候由ニ御座候

一 南月八日東蝦夷地之内エトロフトヤ申所之会所ヘ東中ヨリヲロシヤ人押寄
鉄炮打懸ケ右之討ニ而番人共壱分鉄炮打懸ケ申候鍋釜之類迄申候ニ付番
肉ヨロシヤ人も引申候右両人之者共打死いたし御人数打出仕候得共
番内之者ども申付候而渡海之節御用之物ども申候ニ付エトロフ島在城仕
脚夫人数小船ニ而クナシリヘ渡り申候ニ付先方ニ而六人打死申候クナシリハ動
分之人数者乱し候ニ付仕度之様ヘ幕ヲ二重ニ張弓鉄炮ヲ立置し
和とも申候被仰付竹タバ吹なまし押立置候処人数之一所ニ集リ

近藤今吾門ハ根諸(ねそこ)より亦崩し乗し自分壱人残り居候ハ舟を焼き崩し
払ニ又も掛ケ候を焼キ候ニ付鉄炮ニ而崩し払ニ有之由ニ而右之通二日ばかり綺へ
ヲロシヤ人今やおもしと候を承り候由矢玉ハ兎も角も有之通ニ計ニ
ヲロシヤ船ハ夕ニハ不案内ニ候得共ゆへ寄集ハカリニ退候而も支分等附不
申候由勘ニ向井勘介壱人ニ而御心得クナシリも許可候間候處感心
仕候右ニ付御調候処調役人ニ而も有之スクイ鉄南部佐竹津軽酒井等之
大名四人ニ而仰付候ニ付等程よき出張仕居候人数指配致し右ニ付具足
一脈御求申候処何之氣遣も無之業しも有之候而大方ニ千人程詰可然
様ニ而大名丈ニ而も無之相御掛衆ニ而奉行ニ而も有之調役並間役
居候由を仕入事ニ而も無之居申候

卯五月十九日　田中平五郎

田中□□様

一箱館之仕候船ハ当月十九日箱館沖ニヲロシヤ船一万石程之大船掛居
候へ共参候而右何之ニも有之紀ニ而お座等仕一統軍勢を揃おかし
ホハ舟を焚お待ち之三日程右之姫鳥地勇ノ方へ参り候ヲロシヤ人ハ数
一然も参り不申只船分大筒ヲ打小船分参り候ハ一人ニ而小筒ニ挺七挺程
勝ニ獲候而打取申候大将分も御刀ニ而有之
一打候鉄炮鉄地役同心ホ支配ニ仰付候而回船居候而鉄炮ニ而打合可
申候處猶羽織并鑓持肉等も供金仕お調申候而右之通ニ候向之原
民若十分ニ打候候上ニ而志之ニ通り不申候家来組ニ而對し候ハ相勤今

ヨロシヤ人共一時ニ破り申候得共多く出船しかる所人数一船打死仕候よし
并ニ右之役者共ハ子孫ハ厚ク可為立ママ大ニ御さた不絶由ハ可申
是ニ不覚取候者共ハ右之者ハ松前ハ不案内者ニ付如何様ニ一方ニ而も関ニ立申
候段者ニ而申候右之者共ハ当分者之事ニ相成候趣承り候
一ヨロシヤ船も九月ニ相成申候得共南部津軽川流し来り候得ハ海ニ漂流仕候ハ
皆々海ニ相成船々西蝦夷地へ相成不申候

以上

九月 大日

田中甚兵衛様

田中正三郎

右之通り年始書留もエトロフよりタナシリへ注進
一蝦夷地向井勘介ハ書状差人ニ而クナリしりニ居弱き者ハ不残落ニ
兵粮も沢山ニ有之候得共クナシリ会所ニ中村小市郎殿御役人三人
居候場所根モロと申所ハ御送り申候処ヨロシヤ大船参来候所小島左
人居候場所根モロと申所ハ御送り申候ヨロシヤ大船参来候所小島
存不叶時分の会所ハ火を掛ケ焼払一候いたし自害仕候段者ニ而御座候
右クナシリ沖ニ大船二艘居候而東蝦夷地ニ而ハ六七艘も居候由ニ御座候
右之者共も大名居宅御警衛仕候者共別紙ニ而申上候
別紙之通リ一御蝦夷地ハ廣大之場所ニ付ヨロシヤ
船参候ハ難斗ニ付一家雑家仕候注進之者共多分沢山ニ而地
者共の有船来も沢山有之候
一松前南部津軽之三人ハ先手之者ハ松前と一所ニ相詰申候

一クナシリ分松前へ向第一ニ而母子一所ニ居候ニ付若狭も不動ニ有之
者ハ江戸表ニ新規ニ差遣し有之候由、兵粮ニ付信定[illegible]
又ハおしこ金ニ而壹岳[illegible]候得共[illegible]
斗[illegible]勿論[illegible]同居候段[illegible]
一勤番者并おつまり小倅三人并[illegible]都合六人ニ候
ニ而[illegible]何事[illegible]無之候
大[illegible]通[illegible]松前[illegible]一様ニ御申候
一若狭出帆之儀ハ[illegible]来月ニ[illegible]可申候

[illegible]十七日
[illegible]
[illegible]

一筆啓上仕候、然ハ[illegible]全[illegible]
一[illegible]一[illegible]事[illegible]信[illegible]として[illegible]
[illegible]御[illegible]日本[illegible]人
ニ[illegible]エトロフ[illegible]
[illegible]人[illegible]三[illegible]日本
大船[illegible]エトロフ
[illegible]宗内山田理右衛門[illegible]人[illegible]
[illegible]戸田又太夫関谷茂八郎[illegible]三人エトロフニ居候[illegible]一[illegible]
エトロフ内[illegible]焼[illegible]シャナ[illegible]
ハ[illegible]

よひより平ニ押来り船三艘余之船より赤人十七人宗徒之陸へ上り候を打取
又押よして居て鉄炮打候得共一日ニ合戦中ニ而名宗之人ニ石住之人数ハ
赤人申ニ者此方へ打候ハ、赤人如何之此方ハ二百人之者人先キハ六十七
人之者より申内先キより大筒を打かけ其より御方此方ニ鉄炮を打
此方ニ而者人数を打捨赤人も四人鉄炮ニ而打殺し由一ト先ツ赤人より引
揚ニ付候間赤人を打ひしと申ニ而其も打もせす又々赤人直寄り
其末之入候ハ候寄而寄ハ不叶さて八ツ過ると南蛮渡之鐘も此方
一 これ以後赤人も番人も不残逃去而明日ハ落申候赤人共ニ出合致をな
し逃るに付ても後山中ニ而後戸田又太夫自害致さる
間宮殿ハ丈を見捨して先へ逃て後ハ命を助りクナシリト云ツ
色ハこうさん付候るクナシリより居り候て二日程ニ逃出しうかや心付候ハ、
右て逃しクナシリへ居候所ニ戸田又太夫ハ死ても死骸を見に居る人
まて有りと見へ死し米も九千俵余程酒茶ニ沢山ニ仕也候処是ハ
其人もんりいるし候紋付之殿家不残焼草ニ引揚候日殿家一ツもなく
さりあさる付候事してそれ逃去り日殿家善も不残赤人共ニ焼払
一 尤も殿家を取り候紋付之物を以赤人之船の印さ
りとして長崎表へ参り候宗ヒしてはい候事とお考ニ候
ハ、御国日本之船ニ者此方ニて申し様有之も嘘なし江戸中へる
一 然ル所以来ハ見せしめなと持参日本人不残しへまけき工夫
有人あまりの人ニて候と申ますてや上領国郡まてハ此方ニ参し

拔ハ異説有之候ゆへ認不申候

一去月十五日赤人ハ船箱館に出帆いたし二三艘参り居て候大勢ハき
九ツ時三四ツ時分毎日往来して居申候六月四日松前南部地、
戸田筑後守返遣ひに参り十二日箱館ハ帰り申候

一去月廿日森重多仲四百石積船ハラカン船を船ハ積込三艘船ニ捨
挨拶ハ同様ニ挨拶合薬三拾貫目積込箱館湊出船アカシサキト申
所ニ十日程日和待して夫より イシカリト云方へ参り候所赤人兄達け
寄と申事承り申候 村上左金吾と云者も乗組ハラカン船ハ船中
ニ有之候を此筒を積て参り赤人見付大勢打掛まして参
り候て船をとめ乗込候所赤人の乗り申候船の人数壱弐打と

云て志まい鉄炮皆船より下ハ入置候 村上左金吾ハ差出し候自分一
人陸を歩参とて二百石上陸してイシカリ泊ハ至りトマエと申所ニ泊り候
処多仲ニ案内、赤人船参りて太筒を打掛り候処多仲も其子も
太筒ハ船底ニ在三四丁十丁も打事もならず船を捨て命から
く船をまけて付て参り陸まで逃けて居り申候 居所も未タ
知れ不申候太守様より御急ぎ被成候大坂より参り候大ハラカンと云
筒を赤人ニとられ候多仲ハ武士ニ有之候ハ切腹いたし可申候
所何方へ逃け候とも不知候村上左金吾も松前
ニ参り太筒を取られ候との事ニ御座候 松前殿御申候て天
命逃かたく候と申候 江戸へ申上候て江戸ニ云居申候

田口へ口出合し節口吸ひそうて人をのそうて宗八字と二つと申す能たく
こらはらしてもれ氣味くとうかひ居けるよし
一梅毒人脈みつし而すすし銀汞粉法方ハ大用をすて入候て
く候而日わし人ハ物三つ手物もなし毒人大抵一つ不自然
やめ而八有し候て絶えし名館も本人へ為ニおし破申
山東評津種秋田久保田の城下ニ新合之余人し人数お請候
たる頁候ハ不されとも性り揚候る集りく又ありても
申するハおまし押なとぬ度候以て切き申候大用の也と云よ
年日お不たる合薬も一宗合く絶へ也ハ来ひたりふ申候
如とハ宗すそも申し死お来候合之

一五月十九日毒人私来りけるに私方玉も合薬も清名に出しふ玉なども申し
服七日申す玉を隔ごろふ候出貴用も而なし大玉二つ出来まてさんし
大用而へ気りなし依し故し頼ありし之候
そもとひ入用ら色献ひて玉も薬も一日計候ハ無ひ候まて大抵
むしく之め候お帰来し調候家れ度大の方之申へ只とむしきに入用をい
とひ居て也きふ振方る抵度さや多仲方申しなとふかし居し而お
出し過度之多仲しと申すも二お多ましてみし私大ハ有何而し
御ニ居し候度百る氣来るしおくに心なら候る家は家内るき八更
とも申す能而へ来て吉之異くもに者労ら候る参え私家来にお強也
申する人みなし心得る之候も子く出るみく後る申中く候之候云

卯六月十三日被仰渡　田中伊賀守

――――被仰渡

一　其方儀家督中蝦夷地之儀ニ付而御為筋心付候儀も等閑ニ不存其上　松平周防守
隠居後之儀も不怠心懸候段奇特之事ニ候　思召ニ依而御紋附時服
被下之

一　蝦夷地之義ハ去年より其方家来共ニ進退致来候所去年之東蝦夷地之儀　弥以渡　松平若狭守
万端手当致候両様子ニ付去年之東蝦夷上地之　弥以渡
公儀江相成候　依而西蝦夷地之義も此節被仰付候ニ付其方手当致

両国申立之通不容易事ニ候　然所此度松前西蝦夷地一円之
儀も依而新規ニ御手当ニ被仰付候而右之趣申渡候
右之趣申之　仍之此節ハ御用之由被申出候

卯三月九日

一　此度松前西蝦夷上地之　依之此節諸地ハ勤番として人数相出候
相違

一　物頭壱人　　一　使役徒役壱人
一　侍　三人　　一　医師　壱人
一　足軽百人　　一　船　一艘
一　鉄炮壱通　　一　弓　十張

一 鉄炮 五拾挺
一 長柄 五拾筋
一 幕 五双
一 三つ道具 一通
惣人数 百五拾人
右之外入用之武器等者支度之上御添之御家中増人数為御出可
御渡可申候
四月廿八日
津軽越中守

申六月十六日
一 金十枚
御目付 遠山金四郎
時服弐ツ宛
御使番 小笠原伊勢守
羽織
同 村山大学

右蝦夷地御用ニ付御城ニ而申渡之
一 蝦夷御用として一段精勤いたし
小普請方 近藤重蔵
一 此度蝦夷地ハ異国船来着之節条目見可被仰付
大目付 中川飛騨守
若年寄
堀田摂津守
一 蝦夷地ハ異国境ニ付 松前通西人馬ニ付 越中守金三千両
一 内々申渡
南部大膳大夫
両蝦夷地之儀 百五拾人余出候 三月廿四日御達 四月二日

右之人数当渡ニ被指遣

一物頭　赤沢半之丞

一当分同付　七組

一鉄炮長柄　三挺

一四月廿四日六月六日迄ニ南部辺江出張之由

御武頭

同

同所出張足軽四人

都合五百四拾四人

一同心拾人

一武器弓組　七挺

一玉箱　十四箱

三百石　石橋庄左衛門　年廿七八

三百石　戸来右内　年廿五六

一去六月十八日御鍵奉行より酒井左馬尉殿へ加勢ニ参候由　右之通

右指出候由

御組頭

同

物頭鉄炮方

都合四百人程

五百石　水野勘解由

五百石　鈴木金九郎

百五十石　中村三同

一伊達左京大夫殿より加勢人数左之通

一五百人　酒井内膳

一七百人　梅津半馬

一六百人　津軽加賀

一四百人　同所遠江

都合加勢凡千余人

一五百人　横手

四百人津軽之由

一四百人　戸村十太夫　[illegible]男鹿

右京大夫殿能代之湊へ出馬候人何程と申事も知れ不申候事

内ニ而山人猟人手前百連候由也

秋田人数右之通

一陣場奉行　金易喜内　手勢足軽十五人外ニ小人十人

一物頭　高垣長兵衛　鉄炮足軽三拾人

一同　今村政右衛門　鉄炮足軽二十人

一同　信田衛士　弓足軽十五人

一同　小荷駄奉行兼帯　井上清兵衛　長柄足軽三十人外ニ足軽十人小荷駄付添

一旗流役当　大山源右衛門

一吟味役　大井文所

一制札役　三嶋右兵衛

一書役　荒又蔵人　戸嶋又衛

一台所役　小玉伊織　奈良丞太

一物道　柳沢三治

一分料　神保三清

一作場奉行支役　芳賀吉介
一弓自力　三人
一小筒自力　廿五人　小頭
一大筒役　中川友右衛門
〃　大山貞治
〃　田中善吾
〃　石井三右衛門
一歩行目付　二人
一厩之者　二人
一馬　六疋
一諸自力　四人
一
加茂平蔵
寺内哲蔵
川井介八
村田傳右衛門
一大工頭　壱人
一小人目付　四人

右之通去月廿四日秋田城下御役向候
一軍将　向　帯刀
一番頭　大筒支配　梶本平右衛門
一籏奉行　中山政吉
一物頭　根本雲右衛門
一同　麦谷男介
一同　梅津徳右衛門
一目付　石井永次
一徒頭　林　正之助
一武士　五十人
梅津善右衛門
籏足軽　十五人
鉄炮足軽　三十人
鉄炮足軽　四十人
鑓　足軽　四十人
一目付係役兼　根本彦右衛門
小貫九之助
一大筒役　六人

一弓与力　五人　　一鉄炮　八人
一鑓与力　五人　　一合鉄分限士　三人
一軍揃之者并侍士　壱人
一貝吹　壱人　　一太鼓　壱人
一分料　壱人　　一鐘　壱人

右之外御扶之方頭分小荷駄并侍足軽小人雑兵共者除中山玄蕃
人数書出候　奥書ニ十通写
此度為加勢人数指出候者為指図候急度申入候事一入申含候
且条内之者我不可仍之条右如此相定候上者堅可相守者也

七月十五日

一 此度出陣之人数為指出之上者条目之旨を守り諸事執も致熟和可
申動静も我意申出ニ付致間敷事
一 於所々神社仏閣致乱妨狼藉之族ハ可為曲事
一 雑人并喧嘩口論於有之者双方共急度可申付事
一 陣屋中ニ而高声小唄等喧嘩致間敷事
一 下人共召連候ニ而小荷駄之義中ニ而可申付事
一 陣中人数押之時他之備ニ不可相交事
右之条々於相背者諸事神妙ニ可心懸進退ニも不覚悟ニ而拵
猶急度被申付忠勤相勤候様ニ依て如件
卯
七月十五日

人数御渡之事

一 今度東蝦夷地之内エトロフ島ハ異国舟渡来及乱妨候ニ付攘夷
指向以上之惣様被仰付一和勝手次第無之事

一 諸事御渡ニ難之 右之者急度相守争論ケ間敷義無之様堅可
相守事

一 神社仏閣之外ハ道路通行候様御渡之趣ニ候とも無依怙
贔屓有之間敷候事

一 異国船渡来之節ハ勿論当所又ハ要地ニ相詰候節
とも将軍之御下知ハ我等申付と存急度相守当所ニ相詰
候義者勿論軍務之儀ハ諸事当所御下知ニ急度相守事

一 軍令相犯者ハ軍法令ニ従ひ可及沙汰候事
右之条々堅可相守一統致熟和可相勤候事右中渡
之也

右之外玉手箱之御人数ハ其外之条目書付を以申渡候事

一 当月晦日頃各出帆之積ニ付當月廿四日夕八ツ時出帆可相心得
旅宿相定人数之儀重而可申渡候事着到之上諸事可相守
右之通申渡候条可相心得候 此段可被
人数之者并諸事諸役之者へ急度可申渡候
儀ニ付申渡之通急度可相守此段相心得人数之者へ
不洩様申渡可申候 当月朔日人数割之儀ハ追而可申付候事

数弐千七百人程ニも可有之と相見へ候ニ付、漁事ニ相当し大切之品入置候ニ
ありし者御預ケ置可申候

右

六月日

糸賀叶殿

久貝因幡守

〇代官寄西大坂方ニ寄宗付合置寺ニ来書ニ而相達候

一 蝦夷地之事ハ松前蝦夷地カラフト エトロフ其外小島一ツニ而ヲロシヤ
人住居致し居候是迄之儀ニ候処、眼目ニ而日本と日本と交易之儀相願
之哉可為無之候ニ付、此節おロシ住居致し候者交易之儀千島ニ而一
且又御国日本人と共ニ是迄之通ニ而扱ひ来り候者之中ニ生捕し人
一 九人ニ而日本人と御手当ニ而八人とりウヤニ送り帰し有之

当時ハ松前若狭守ニ而御手当蝦夷地之儀モ是迄同様之儀ハ御手当不相成儀ニ候
一 松前之儀是迄之通交易通商之事ハ申聞候ニ付、又者可有之
一 御知行先ハ当時ハ蝦夷地一円相應ニ相成候ニ付、是迄之通被仰付候、且
是迄之湯治ニ而之御用向可被仰付候、松前若狭守御預ケ被仰付
若又及見候ハ南部津軽且佐竹酒井等ニ而出陣一同ニ及候而
自然ニ相成候ハヽ不及申当蝦夷地ニロウヤ可有之候故日本ニ船を一艘ニ而
ヲロシヤ兵ニ而鉄炮之儀相成、其外共無之候事ニ候、又交易通商之儀も
今般御徒松前若狭守ニ而ロウヤ今ニ而通路相止め候ニ付て、突然
ニも難相成候ニ付、右之節ニ而之儀ニ付及見候而ハ大乱ニ
相成候而者不容易儀ニ而大川村等ニ而奉行を始め手当異国

右諸事指揮致し候ニ付御遠慮無之安藝守方より萬事宜く相心得書無り
申候粗相無之趣相達無之世話いたし候八先方唐説ニ而申し
右之趣夷殿勤番場ニ而申渡ス

武公様御入部之事

一 文化六年巳三月廿六日
殿様明ヶ七ッ半時御供揃ニ而西丸六ッ時 御發駕高輪下り天気能
小金 御旅館江同日八ッ半時 御着被遊候
一 廿六日強雨大雨牛久 御旅館江着六ッ半時 御着被遊候
一 廿七日天気能府中 御旅館江同日七ッ時過
御着被遊候

一 廿八日天気能午上刻御機嫌克
御着城被遊候當御発駕掛より四月朔日御在府中参府之由
但御着城ニ付役人麻上下着用翌朝中ニ付
御道中
一 廿九日小金御泊り
一 廿六日雨
小金の駅を出るに行かきし都のきさを思ひ出してよめる
別もおしきの人をたのみ云ひかくしぬるひの衣を
又小金をたちて田面をへけるに一人のおりめひけるをとくと
那辺と今花の名はりやわしむらん春の田面に猶るかゝる

小倉家にて

君か代のためしなりまし花ちから移もむさうな桜姫君の姫に

雨まの後しきる面影さへに媚りけれハ

旅にて一樹婦りぬる菊を捨さゆる身も婦て旅人

一 廿六日牛久に泊り

牛久ニ泊をいて松の木かけしある木多き藤は

御茶屋をみあけまて

末をしたくの樹を御れて見まもとくの面ふけくを根

府中かけくさ山を詠てくまかる

いさみあたら御前筑波の山さと頭を見上てすくる旅路ハ

府中泊りにて秋日ふかくきこえけれハ

旅まくらまた枕も涼き雲の千々初音はきゝけり 郭公

一 廿八日

秋風にいさゝれて亭亭いやしきとおもく向ふをこえて

かしましき声ハさらぬ秋の詩への辿る道をつかさと

文化八未年正月学問之義ニ付御達之事

諸士国中学問之義原り

青志きものあるものハ面々子弟八歳以上よりいて儒者稽古

文武之儀ハ教授之者之御指図を請候得共猶又指南いたし一統儒者之段

成候ハ、猶又儒者之文雅ある入門いたし候義者勿論之事候

支配頭ゟ相届可申候

出精之者ハ其趣申立候分、出席日数ニ不拘、其者之器量之通可相心得候、不
精之者も右之趣ニ而其趣申立候条、何ヲ付惰怠無之様教諭可致候
猶又学者ハ人々精力次第ニ文才師範ニ而も学理議論出来候様相心得候
事ニ候

右史伝毎月一度素読吟味致し、条読之内一部宛一冊立之
吟味し、其好ニ寄講釈・読方等其者ハ其趣相尋、来月十五日ニ肩付
一 右ハ前条之通ニ候
　　但素読吟味日限之儀ハ追而可相達候
右同所ニ毎月一度会読致し、経書之内論語・孟子・詩経之類ハ指
南之方ニ相掲、其上来月十五日ニ月付ニ而差出可申候
　　但会読日限之儀追而可相達候
右書学問之儀吟味之儀、史伝忠義之者
其外読書之節ニ　　何年来学問ニ而も相勤候
　　右日限左之通
正月七日　除　十五日　講釈
二月朔日　素読　十五日　素読
三月朔日　素読　十五日　除
四月朔日　素読　十日　除
五月朔日　素読　十五日　講釈

六月朔日　素読　十五日　素読
七月朔日　素読　十五日　休
八月朔日　休　十五日　講釈
九月朔日　素読　十五日　休
十月朔日　素読　十五日　講釈
十一月朔日　休　十五日　素読
十二月朔日　素読　十五日　素読

文化十四年盲人渡世之儀ニ付御達之事

一　盲人渡世之儀ニ付左之通御達
右之通御書面丹羽様より御渡被成候右ハ一紙ニ御認御渡之御書付写

盲人共之儀渡世之藝業之取計ニ有之ミハ武家ニ而抱候他之様子
候ものハ格別藝業之外市中住居いたし武家ニ而召抱候他之様子候ハ
ハ検校之支配ニ候へき者ニ而勿論ニ候得共市中ニ而ハ盲人
多醫業高利渡世致候者ハ座中之支配不受様ニ而相聞候得ハ是迄
右之外都而百姓町人之内ニ而盲目ニ相成候ものハ武家之譜代之者之ほか市中
住居いたし候者ハ主人之屋敷内ニ而差置候者ハ琴三味線鍼治導引等之藝
業ニ携り候者ハ検校之支配可受者ニ候事ニ而右ニ付ても心得違無之様
之人ハ勿論ニ而も町方ハ其所之町役人共ヨリ申付候而検校
支配候筈ニ有之者共ニ可致旨人別帳ニ書記置可申候
右之通可被相触候

同　三月

文化十四年青山…御達之事

御先代より結…

肉…

…

…

文化十二年…之事

一　諸向へ

…石以下…

青山…

文化十三子閏八月　武公様御逝去之事

一　殿様御不予御養生切之由只今申来候
一　当殿様御機嫌…
一　殿様…
…
一　両様…
一　当屋様…
一　若殿様…
中将様…
…

月代之義ハ当分見合(○)御納之上ニ而者 御葬送後同様申合当分見合中候
其外之面々ハ追而可被仰出候

一 布衣以上之面々ハ 御葬送之後月代剃候ハヽ
御忌明之御機嫌伺之後ハ勝手次第月代剃　御葬送御済ニ付罷成剃

一 諸同心以下ハ来ル七日
　御葬送御済ニ付罷成月代剃可申候

一 町中之者共ハ来ル七日迄ニ

一 諸侯之分
　御葬送御済ニ付罷成月代剃可申候

一 末々江戸分御役人共ハ 右御触ニ付罷成 諸家之面々ハ月代剃候ハヽ
　御葬送御済ニ付罷成月代剃可申候

一 諸侯御家来共 右御触ニ付同心以下来ル七日
　御葬送御済ニ付罷成月代剃可申候

一 御家人共ハ右御触ニ付町中之者共月代剃可申候
御葬送御済ニ付罷成月代剃可申候
但在江戸分御家来同心以下同断
但在江戸分諸侯御家来御触ニ付町中之者共月代剃可申候同断

一 鳴物音曲数日之間停止之事
(○)右之通可相心得候

一 普請武家ハ日之間停止之事

一 町中之者ハ日之間停止之事

一 御葬送之後諸所小商之類普請ハ日之間ニ而十日過候而

一 御三ケ日之間停止之事

一 高口入之義ハ右之者共相止可申候
御葬送御済ニ付二十日目分

右者ニ付

一 月次講釈之儀ハ御忌中ニ付延引可仕哉
右之通御心得可被成旨被仰付候事

一 殿様御家督継目御祝儀之通御当年ハ御流例之通当中（御目見ニ付而者）
四人御忌被差出候御役人共ハ御伝ニ年寄中ゟ右当方御目付衆ニ而達可
被成御役人共ニも 精御庶流用御例之通代々相成御例之通ニ候
達之為相心得候様可申上候ニ付外御用達置候ニ付

一 殿様御隠居（御申聞）
　　　　源武公様と奉称候事

一 来ル十四日（御申聞）

一 武公様
　御家督御例之通被遊候様御精御庶流御用之事

分二所同し御南御側ニ而右之通被仰出候ニ付御役衆之御釈
見分御側ニ而御出之節ニ相成候間御役人共へ相達候様被仰
六ツ半時御揃之事

一 御書院当中ハ御組頭中并御役人ニ御使役中ニ六ヶ所同分八ヶ所同し
御南御側ニ而小宅清兵衛上ハ並居大ニ当中ハ組頭中ゟ御役
役中ニ休息忠馬上ハ並居候様可達候事

一 年寄中ハ六ヶ所御用南御側ハ所役人次ハ役々御用之節以
相心得候間先以可申付御側ニ而御役衆ゟ御精御用御供之
通り御目付衆ゟ役中へ當中并右之通達可被成候

一 武庶（御申聞）
　御家督其之十二日江戸表
　　　御山枝同十四日

法事へ　御通被為入候旨御達有之候

一 武公様御墓参被遊候節ハ御通ニ相成候日割ニ而御沙汰相成候

但御前ニ而〆右日限相成候ハヽ御沙汰申上候様被仰付候

相成候

九月十九日ゟ同廿六日迄御達座ゟ御布告之上同廿六日ゟ廿七日迄御衆議

其外ゟ御首尾ニ而右揃候而同廿八日ゟ十月二日迄御朝会ゟ御沙汰

式以上二十日間御精進之上十日迄惣而五十日也

武公様御法事御法会之日来ル廿六日一日御精進被為在候ニ付御法会

以ニ而相済候旨御同役中申合候由ニ而相達候

九月廿九日
明朝御前御首尾月代剃候段被仰付候間御同役中御目見之上相達

すぐ申上候

一 上使青山下野守殿酒井若狭守殿を以上使被仰出候

中将様へ御遠慮御免被仰出候

一 太田備中守様御用番ニ付年寄衆ニ而御上り被下候ニ上り

十月十二日
一 若君様 御霊屋参詣ニ付 五ツ時以来

其余 御官名ニ而

二十六日
一 武公様御忌日八月廿六日ニ付 御参詣

公儀ニも御仕置以来ハ八月十九日ゟ御日記ニ相見候旨御達申候

右之通御同役中御当番中ニ而御達申上候

文化十四丁丑年十月 日

一 前書之儀取調候而年限過之者共之内ニも左之通差出し
内ニ而名前之者も有之候ニ付当分御預ケ生合之通差遣
相成候ニ付御下ケ可被下候
　但追而取調之上相分り次第可申上候
　　銘々名前書持参之人ニも御座候　但右之通
　　此者相替り候ニ付
　別紙之通ニ而年月相違
一 両丹後様御屋分印判形有之候ニ付一紙ニ相認差上申候
　文政十三年寅六月改合判之通遣し候

一 此度世上通用之為メ改合判金新鋳ニ被仰付候　但寅六月
判形之内金壱両ニ積り出雲守殿右之者小判ヲ合判同様ニ引替
ニ而候而御改を以通用之儀可被取計旨相心得候
　　十四日
右之通御尋之旨相心得候
　寅六月
此度年号文政と改之事　但右之通
　以合通用之事
　　但右之通可相心得候
壱両之者共分御改を以通用之儀一紙ニ相認差上申候

此度世上通用之為吹直シ候弐分判金之儀、来ル十日ゟ
通用可被仰出候ニ付、通用小判・壱分判ニ引替両替屋共江
可被之条、通用方可申候事

一 小判金之儀年久敷相用、自然と瑕金出来候而世上難儀之趣相聞
ニ付、通用之為御吹直し被仰付候ニ付、切レ金壱両ニ付瑕金ニ
も無差別、小判・壱分判・壱分判・弐分判無代ニ引替可申旨
尤遠方之者ハ来月十日ゟ後藤三右衛門役所ニ而
差出候者ハ相持候儀ハ其町役所江差出可申、瑕金両替方ニ而引替候
差支無之様、通用為急度可被申候事

一 弐分判切賃之儀、一分判同様ニ相心得、相対ニ而諸方相渡可申旨

右之趣町中不残可相触事
右之趣被仰渡候ニ付
寅十月
右之通被仰渡候ニ付、可相触旨趣ニ付
別帋

本町壱丁目　後藤三右衛門　駿河町　三井次郎右衛門
本革屋町　三谷九郎　上槙町　泉屋吉次郎
室町三丁目　竹原文兵衛　金吹町　播磨屋新右衛門
堀留壱丁目　今屋治郎兵衛　大伝馬町壱丁目　殿村佐五兵衛
合八人

文政元寅年異船浦賀江来候事

寅五月十四日浦賀江異船一艘入津致候由船之大サ三千石積位之船ニ而人数
由来者不詳鉄炮なと備り三方共ニ出入口も有之人数之由船ハ惣銅ニ而
張しもの之由右ハ浦賀ニ而船ニ乗候者申出候由船ハイキリスゝ由風
当悪しく候ニ付船方ニ而石被成候より四艘ハ沖ニ居り一艘入津之由
大ハ浦賀ニ而出届候共為一通達し候而も相成不申候ニ付人数も
出し由合浦賀奉行衆へ申遣し候ニ付当所御役人并番代
今度船ニ而
出張候由　　　公儀御役人衆中も出張浦賀へ入津之異
船ハ此方之当船ニ而参候由其方船と趣ハ右之通ニ而候
之趣ニ御座候由

イキリスハ阿蘭陀之属国ニ而阿蘭陀ハ敵ニ而日本へハ商人舟入候而商物
入来り候ニイキリスハ近来阿蘭陀と敵ニ而阿蘭陀様ともに成
候由則イキリスハムスビヤノ事之由右ハ去七年ニ来候船ニ而候
右持色売買いたし度を云ふ右船ニ而御用之様ニ而承り遣し候
様ニ而又其節之右船ニ而ハ浦方ニ指出船見ハ内心ニ而存候
ニ付其船之節ニ驚ニ而候由右入船之節ニ而大男も
有之候且又六七尺之男ニ而候由一統ニ驚入候由右船ニ而
有之沖之船ニ人数弐百余り人数有之候由
其方当船之者共ハ浦賀辺ニ漁船其外を集候而其方へ
之者共漁ニ而挨拶候而青物ニ而御座候由

右一件当月十三日江戸ゟ申来ル

文政二卯年墓碑書方申達ス

一　法名之、

此家中并町方墓所ニ返墓碑書様之儀左之ヶ条之通相心得
返候様申来、然ル処年を経候得共面々相互ニ不行届之儀も有之
哉ニ相聞候間今般当年寛政年中度々御定之旨ヲ以御達之
死ニ相成候者ハ大方之儀ニ付返候得共右者掛法名も同様ニ候
掛合以来年々承り返候条之月石川久次郎小沼次郎左衛門
書出候様可被相心得候

但中出之ヶ条書之通可被相心得候

一　新規ニ　墓碑年号月日并俗名等書　他所ニ而　石碑之儀或者
一　此家ニ而死去之者旅先ニ而死去之者書候
一　俗名ニ　何年号月俗名等
一　公方様ニ同之前ニ而或者何年何月何日
法同之
一　法号之儀ハ日光　法然ニ俗名等認メ江戸分ニ返ニ承
右承り候得共ニ無用
一　寺方ニ而葬式之儀何年何月何日或者何月ニ付
一　返ニ姓名名乗ニ付姓名名乗等
一　隠居ニ　俗名年号月日并隠居名等

但隠居之もの旅ハ書可申事

一 寡ハ父姓名名乗書添候寡男ニ申候旅ハ書可申し名同断他所ニ

嫁ら又ハ差置人姓名名乗書

但婚姻姉妹他ハ嫁ニ部分候再縁縁ハ名同断

一 男子女子之出生男子ハ名乗共男子女子ニ而可書候

但同様男は婚後者 氏年

一 養子ハ実父ハ姓名名乗実父他所ニ出候ハ又ハ差置人ハ姓

名名乗書

一 養子之妻之旅養父ハ名名乗書同断

但養女ハ妻も同断

一 初ニ 同人年号月日次男三男ニ而と

一 女子孫等又ハ妻之姓名名乗他所ハ孫等又ハ差置人之姓名

名乗書

一 死去之年号月日年齢

但惣領次男末子共

一 婚姻披露前之旅名同断

一 妻聟名新細ニ加増ハ年号月日書添候書

法役不向之人減候違之事

一 御役目ニ而[illegible]有之て先給も有之不在披露入用辻

右之御役法役不向ニ入用書減[illegible]

職方共ニ而右様之品ニ合せ振候而は難出来候間御勘定所御證文
之人職方江申付候得共上方ニ而ハ是迄不仕事ニ付
從向後割ニ職ニ而申付候

一 近年ハ諸国ニ而吹潰候所多ク有之候得共右之通ニ而も不残背候
右之通ニ難申候得共在所ニ而ハ在候史之元緒ニ付御触茂出し候
一 下廻り之者共ヘ相添合天秤ニ而吹分候吹候之ハ内分停
取扱方も厚ク遂吟味從向ニ入用二割職ニ　但右之儀右同
も右同様之義縮ニ　但之者共条々相心得出しも此割ニ職方
取調可申事

子三月十日

金銀引替之義ニ付御触之事

水野出羽守殿ニ而林肥後守殿江被仰付候ハ一歩判之儀ハ吹直し字
吹直シ之　但是迄小判並貨判ニ候得ハ来ル者ニ付吹直し引替
不残ニ相成候ニ付小判並貨判ニ候ハ小判吹直し候ハ新金位
引替候分ニ割合通下段通用二歩金も可為同様事
一 引替金之義ハ小判並一分判ニ而割合ニ付引替之ハ小判並一分判ニ引替
と引替方之義ハ小判七分並一分判三分之割合ニ而交ぜ引替
之者ニ付来ル吹直三割引替ニ付増歩紙面相心得候者共
引替可申事
一 貨之義ハ右貨ニ而右吹方引替方大坂ハ右引替方之者共

猶又相対ニ而

一 引替ニ不及古小判壱両判并ニ貨物不残引替相済候ニ付

而ニ引替所ハ差止候得共引替之儀ハ不残相済可申旨可有

之候

右之趣可相触候

同九月

新金銀引替之儀去年ゟ元禄銀ニ引替差止之事

一 慶長銀ハ元禄銀ニ引替可申候　　銀座ニ而

元禄銀之儀ハ去年中ニ引替相済候ニ付　先達而

相触候得共今以引替不申者有之[illegible]候様ニ[illegible]

元禄金去年限引替候様ニ相触候得共引替不申[illegible]

今ハ其年限ゟ内ニ而迄ハ引替可申候由引替差止候事

[illegible]ニ而当分ハ引替可申候事ニ[illegible]

[illegible]

同十二月

小判金壱分判金両替之儀ハ金銀位之事

小判金壱分判ハ[illegible]

水戸殿小判同様ニ付[illegible]

当時通用ニ而[illegible]元禄金弐分判金両替ニ　古[illegible]小判

吹金多ク引替[illegible]引替所ニ而候[illegible]

[illegible]

[illegible]世上ニ引替[illegible]候年迄

服し候ニ付此度小判金吹直し同方之儀ニ付ゆめ吹
出し候　何事之金判之儀年久ク相用候ニ付極印なり
通用も無之候ニ付吹直し文同様相止させ候為諸民之為ニ相成候
通用ニ付而金銀通用ニ付而無滞相用候様可被申付候事ハ不苦候
可被相触候
右之趣可被相触候
　　六月
右之通被仰出候旨可被相触候
文政二卯年七月十一日　月番方達
文政二卯年琉球船川尻浦ヘ漂着之事

琉球船長サ十二間横十二間テウナチウリノマヘ三ヲ作り候柱子
波除有之候檣ニて張帆柱二本内壱本ハ切折り候相柱横
乗組二十二人之内都合八人ハ絶命いたし候上者其所ニ相
居候者ハ乱髪二人候ハ四人ハ為葬候由候得共色々
去閏四月十七日琉球中村出帆小風ニ而川尻浦四人ハ付添候其上
陸之者ニ而請取候為元船ハ流し候得共兎ニ角之儀候ニ付
由右者年貢運送之船ニ乙御書付十二枚白木箱ニ入有之候
右之者共之内好之者ハ船ハ便宜ニ寄り候而所々神社ニ而
手代相越其所ニ而及取計候由右者其所之ニ候得者取締
此口之川目付者口先御披見ニ御座候世人ニ而為通ヘ候ニ付置

一同年六月十三日物奉行江申渡候書付之写

覚

私共乗船之儀中山王年貢米積、琉球八重山島ゟ薩摩年貢米
積入、去四月十五日渡海仕候処、同十七日夜大風ニ逢、梶折損候ニ付
右帆柱十本一艘之儀ニ付、大桁橋切捨、漸当地ニ漂着仕候
右之段申上候、以上

子七月十三日

琉球船之泉崎村伊村親雲上
船頭
當銘 印

大久保屋敷来濱ニ敵打之事

弐百石
大久保加賀守殿足軽
持筒同心与力
向井伴兵衛組
池田隆蔵
年廿五才

米五石弐人扶持

百五十石
先手鉄炮組
伊田庄兵衛組

米三石弐人扶持
池田勝五郎
年十六才

右両人親ハ池田只八与申同足軽ニ而御座候処、当七ケ年以前戌八月
十二日同組澁谷藤助与申者口論仕、踏込殺之、切付逃去申候
手疵ニ而死去仕、只八倅両人敵を尋罷在候処、今度
子兼加賀守屋敷二本榎ニ而見付、打留申候ニ付、右之段記之

急ニ遠島之者此味中文政三辰二月家中[illegible]出奔いたし候加賀守
屋敷[illegible]重[illegible]候処右[illegible]来川[illegible]家中[illegible]之[illegible]
上[illegible]中心[illegible]右京[illegible]之[illegible]致急ニ[illegible]詮議[illegible]
[illegible]当[illegible]年[illegible]主仁加賀守[illegible]　[illegible]之
[illegible]加賀守[illegible]大坂[illegible]代[illegible]
大坂[illegible]国[illegible]右[illegible]
[illegible]京大坂[illegible]中[illegible]八月[illegible]
之[illegible]相[illegible]又[illegible]
[illegible]非人[illegible]門
[illegible]中[illegible]二月[illegible]

一所[illegible]新島[illegible]中[illegible]遠[illegible]当月
四日江戸出立[illegible]中[illegible]門[illegible]
[illegible]右[illegible]十六日[illegible]門[illegible]入[illegible]下[illegible]
通[illegible]村[illegible]同[illegible]
[illegible]大[illegible]
[illegible]中[illegible]岩[illegible]端[illegible]
一[illegible]思[illegible]居宅[illegible]門[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]百[illegible]
八[illegible]口門[illegible]口[illegible]一同[illegible]端[illegible]京[illegible]

とゐふ手向ハ彼死又ハ近出し候ニ致候上ニて之を致候強飛指討ニ之稱

押認ヲ看是ハ切テ之方ハ皆其所を死と申候其外可有之人ニ討

留申候強飛義ハ三方ヲ討と離つ候事ハ此方不存候由

一 前ニ女房ヲ以手ニ癖有之候ハ万御傳承ハ悪事二十有之由ニ

四人四方ニ塊有之又貴古来ニ出候所指並ニ致古来ニ指並

ニ而當指手ニ而當ニ掲不致四人ニ強ヲ被也入候自當指心就

強とゐふ方先祖ニ而も先人其女房義指ニ孫下ハつ然候さ

其由古来不思義ニ而不及手ニ而向し候而ニ而も人とも外ハ初孫不

清ニ存候先ツうし付候而初来候由

一 親只今ニ而付ニ而強當方御付近ニ而ニ方ニ誂し候親其以外義大

指付候ニ而其曲ニ不依法度候ニ而切候所ニ其方不思長万分大

指討候ニ申候ニ天命と存候由

一 當人武術之事ハ同家中山方并ニ此候同寺并ニ女房共門人

ニ而一刀流ニ而申候門弟ヲ取候術ニ而一ヶ年程修行ニ而強飛

義ハ二三年も相学申由其免許ハ不致候由

一 強飛之事ハ並眼殿御上り候ニ付而ニ親方ニ而由緒付

候由ハ修行之先ニ而無之由門弟ヲ指料ハ親中つりニ侍ニ而

之由親付候ニも又ニ無之候者とも無名し由

但強飛方ハ長ヶ三尺寸七分かり方ハ長サ三尺二寸七分

一 強飛事ハ伊代國村ニ而新飛之事ニ而能ニ其門弟ニ出生

一 以来者ゟ別段家督後ニ相成候以後出生之子供足軽其外之者
召抱之儀者只今迄之通ニ而例ニ不拘可召抱旨被仰
付大将ゟ付届候様申付候旨申
文政三辰八月廿二日

一 大久保加賀守殿ゟ被相越候御書付写万石以上ゟ去々寅七月
迄之内ニ而以来当分之儀浅田只今ニ付去ル頃ニ而取締可申
候旨ニ付右之万石御手当之儀被仰付候入用之節
二月晦日ゟ之以下之掛り月番之方へ申出候様ニ可致
旨被仰聞候ニ付右之段申上候去未以来
子浅田御役所廿一日同人宅ニ而浅田門次郎ニ申渡十二日ニ而相済

右共被仰付候ニ付此度御用番御老中ゟ万石以上之内御取締被仰付候次
第ニ相成候而付候処此段各別之儀ニ付右御届申上候討当
以上之儀者御役人ニ而右御手当之儀江戸表御用番之方へ
御達被成候ニ付御届申上候

一
辰八月廿四日
向井源兵衛
浅田鉄蔵
伊田広右衛門
浅田門次郎

書文
覚以御勘定所万石以上御手当討果中ニ而申渡候御勘定所ニ而
取計之通り申付御勘定所ニ而御尋之儀者討果之儀ハ是非

之役人ゟ始末書届振通り可申上旨被仰渡候江戸
屋敷へ参り共小田原表へ為知届ニ而出し候とも八幡
其掛合三人参り合候処誠ニ存外之事為心付金十
両ツヽ被下候ニ付差上置候処入用ニ付遣し候八日頃
ら参り候親類共ゟ差上度候儀ニ付
一 万物病死ニ而も急度相守りてハ悩無之様可被成下候
申候

疵所左之通

一 左し耳ゟ下ゟ外ニかけて切下ケ　長五寸

大工町屋店
九兵衛
年三十三

一

一 肩ゟ左右へ欠出て切下ケ　長九寸三分　深三寸
一 右之肩先きゟ背へかけ　長壱尺四寸　深四寸
一 左り胸先ゟ二ノ腕迄切下　長壱尺六分　深三寸
一 右二ノ腕　長壱寸
一 左し手大指切落
一 背ゟ左し腕へかけ　長九寸ホと　深四寸
一 左しゆびくろ　長四寸四下　深八分
一 左し足切さき　長四寸余　深壱寸
都合九ヶ所

右九兵衛妻
りん
年卅壱

一御鞍(?) 一ヶ所
一御細縄巻ヶ所　長六寸　保寺

水戸宰相様
　御家老中迄

向暑之節弥御無事被成御座珍重奉存候
然ハ先達而以使者申入候、右ハ御領国中私之足軽共人
之者親類之者田中附置候、御家来之家来共私方江
来候ニ付、使者を以右之人数差返し候、家来共之存念ニ付
急度御沙汰以使者申入候

別紙

此度私家来御領国中ニ而足軽一ト通り之義ニ付
先達而御懸合申候得共、御家来共一同
御滞在中ニ而御申越之趣承知仕候
又家来共中へ急度申渡し御念入之事
候処右之人数之者ニ而御聞届ケ被成候
事故ニ付万事御取計(?)候得共御家来仕
合之処何分ニも御取計被下度候
右之段可然様御取計被下候

大久保加賀守使者
志谷源次

分ニ
盤舟恵信院上人義も右同所ニ罷出候ニ付
新知五拾石　　　　沢田強斎
口　　　　　　　　同　門次郎
右者去寅年之飢来満百分ヶ村高ニ付浪寄具ニ達
候胆神助し至く先年ハ先年中御へ紀言皇ニ相当り右方
以悟強斎八年以御節年々門次郎律ツ次郎八御年ニ而方
橘第無し悟藏者相強心底不息平竟孝心厚ク実
武つヽ相定軽き身分ニ而者特ニ至ニ而茂詞果し始末不及苦
相守一賑ニ感入候仍之右両人之新知五拾石ツヽ下置候間弥相
励候様
右列座ニ而遠藤庄兵衛申渡之郡目付立会申渡之
一　　　　　　　　沢田強斎
　　　　　　　　　同　門次郎
代ニ而当帳入と罷在候事
　　　　　　　右両人江
右之者孝心厚様ニ而申渡し節相守此度遠藤仰渡之一賑之
事ハ格別ニ相為土八文一己以悟人之可致身分世上之
相守以浪事ハ上之身分ハ勿論我等若之も不諭ニ振ル心掛万孝之道

右届仕

右加賀守屋敷書院ニおゐて用人立合申渡ス

文政四巳年異国船乗出し候事

当七月十二日羽咋郡村之者漁業ニ罷出候由之處陸ゟ十里程沖合村松

方角ニ当り候由ニ而異国人七人乗候唐船ゟ七人乗候船ハ異

国船ニ有之候所近寄乗候而小舟ニ而参候由ニ而右侍

島船之内ゟ難風ニ逢候而難儀之体ニ付見届候難儀之様子ニ

見へ小舟ニ而参候處右之者不残船ゟ追参候処自分侍ル

戻り申候右之船ハ無別条罷帰り申候

文政六未年異国船沖合ニ見へ申候

三月廿八日河原子村之漁船異国船ニ出合候ゟ振舞貰候由右之者共

船頭其外拾人乗合之船漁場ゟ十里程沖ニ而寄候船ゟ六艘之内四艘ニ而一艘ニ六

人ツヽ乗組候而漁船ニ寄来候而積有之候品々貰候由ニ而鯨捕候魚ニ有之

漁具を貰候後此方ゟも酒食之類を遣候得ハ悦候而帰候様子ニ有之候由

右之者共申口ニ而異人之言葉通し不申候得共手真似ニ而相通し候趣

所之者共見届候由ニ而十里程沖ニ而出会候由ニ御座候

一 未六月九日羽咋郡之内異国船沖十町程之場所ニ相見へ川口ニ入

相見候得共帆ニ風を入乗行候処浜辺ゟ見候処仕様子御座候

右船を見申候翌十日ニ何方へ罷越候哉相見へ不申候

右之通御座候

松平伊豆守組

同
御目付　池津伊勢守
河方佐渡守
御徒目付　青山某
普請役　杉山某
大筒役　竹谷忠兵衛
同　某郎太兵衛
一
右異国船之儀ニ付、右ニ相詰之上御詰合ニ付、当分御用被仰付、彼是差支候ニ付、
人足沖合江罷出候由ニ而、右罷出候由、御詰合之上、罷出候者共ニ而、
其外之者共ニ付候ハヽ、猶又相心得可申候、

壱朱金通用之事
今度壱朱判吹立被仰付候ニ付、一紙之内壱両ニ書付写
此度世上通用之為壱朱判之新規吹立　但壱両ニ付
判十六枚之積を以金吹立候積ニ付、是迄有来候二朱判、壱分判、小判
同様ニ相心得、通用可致候、無滞可致通用候、
右之通可被相触候
文政七申年
五月

文政七申年異国船渡来之事
申五月廿八日晩、常州大津浜沖合四五百町沖江異国船二艘来り、此内
同船之漕船弐艘漕寄候、浜辺江上陸候者、大船ニ付、漕船ニ乗り六人余

右漁船之跡ハ付来り候ハ、其時大勢集り待居之舟を渡ハ、乗込文待
居一艘ニ者六人乗来り候ハ、右此内ニ壱人又ハ二人ハ頭立候者ニて此方之
役人か衣ハ被り物をかふり候ニ金十八九枚かし 此金ハ見事ニ四五分ほと大きく頭かふり白き板
金ハ文字之形あるを 自分ニ口を候ヘハ付茶穀し交易を致す者也 此方
之船を伺ふ人ハ夫を以仕舞し沖ハ追かけ候ハ、此方ニ
舟を遣候ハ、漁船ハ沖ニ出候かハ見人ハ取り候て
らハ海を添き候らんと仕方をいたし候ヘハ支払人数十二人と乗式
艘を漕出し人家ハ入候ところを船ニ手招し当役ハ沖ニ
大船沖を乗出し来り大炮を放つと云又一役ハ見
侍馬船弐艘漕出一町程沖ハ来り招子を伺ひ候ヘハ見人と招き連

候らんと手招ハ固く見人も大きく船ハ沖ハ漕出し招集ハ不成を以し
候ハ其ニ沖ハ皆ニも乗し此方より漕らん手招ハ是時ニ大炮を放し候ヘ共
いふ此日も大船ニ艘遠見致り候大船ニ艘右戸其間之沖より
一里程の所ニ出り居候り夕方ハ四艘ニ成り此日ハ当時分大炮十本程を打
三ツ四つ音のかし 同時分大船より侍る四艘一艘ハ六人ニて舎り込其四人一艘ハ引き込み
擬定之大津浦ハ来り候て見る程乗ニ而し岸ハ来り又候の見人と招く
此時家の戸を立置ハ見人之を取しき者当方ニ〆置候と候の
日本人ハ居る又見人も四人おて船の見人ハ之れの如き事を海ニ四
艘ハ船一艘ニ乗り候ハ又此事を任せ候の身を渡し見出る事の
四艘出ハ沈として一時余り遠退し又沖ハ見る中ニ艘ハ旗

のぬき帆をかけ荒川の方へ走る一艘ハ直ニ沖へ離れて去ル此段
こみ入り振ハ無之候一旦人参と集て船も急ニ振り返し異人相大
体見分ヘ入候ハ修行大子く相見候此内小男ハ日本人の並ニ候衣類ハ
羅紗毛織革抔のぬいくるみ上ハ袴之きなりわハ此方の股引ぬい被
りものも色々ありて異人共衣類男五ツも持来り候合羽ハ茶緞子多く
好ミ之葛籠の類を背ニ煙草ハ至而よきにて又喫ニも相用
鉄炮四挺
右ハ此方の鉄炮位ニ而筒ハ極め位同合色白く壱合位ハ鉄ふ
ニ似なり火味ハ同じ火石と金と合せて火出し
丹羽ハ其外ニ候、

異人来る之節之為手当人数当月十九日揃出張大津詰

一番手口先手物頭 広瀬靱負 組支
同断 矢野九郎兵衛
同 御目付 土屋伝右衛門
同 御徒目付 伍本七之允
同 同 菊池三之允
同 同 手賀三之丞
同 普請役 今津 惣彦
同 同 和田 猶右衛門
同 大筒役 山 勘之助

同　　　　　　　　　　同　高山　角馬

六月朔日出深川尾張

御先手物頭　　　　　小河原吉兵衛　組五

同　　　　　　　　　前田　熊蔵同

御使番　　　　　　　桜井　四郎兵衛

大筒役　　　　　　　三井子　八十兵衛

同　　　　　　　　　岩田　林兵衛

同　　　　　　　　　同　平十郎

同　　　　　　　　　吉川　吉右衛門

同　　　　　　　　　小河原七左衛門

同　　　　　　　　　小泉　与次郎

同　　　　　　　　　森屋　吾三郎

同　　　　　　　　　三井子　庄三郎

御徒目付　　　　　　三井子　庄三郎

同　　　　　　　　　逸見　猪八郎

湊村之漁人異国船ニ出逢し候所ニ而同舟之者ハ不残捕候而異人十六人
大津浜ニ上陸致し候異人共ニ而捕押国ニ合戦可致旨申来り
候得共私共も無之候ニ付前段之通日本之掟ニ而救候ハ無之旨
武器類用意も無之故ニ船中之様子見合之儀ニ付一統ニ及訳候ニ
至候ニ付猶又浜之内異国船ニ出合ニ而船中ニ投込入候而由ニ

頭巾様のもの又ハ大キ成笠か亀の甲の如き大さあり根ゟ八つ六つる
出ル仕方さへよし雲ニ包中ゟ出由ニ候其実ハ是迄稲の尋ニ違ひ候
様ニ而も又風雪も有りしや
湊信濃守
御目付　笠井甲太夫
御徒目付　荻　何右衛門
大目付　木村忠右衛門
同　高部七左右衛門
同　同大学頭殿
六月二日中山備前守組付与力請取出候同大学頭殿江相済

撿使御小納戸　野村角馬
御同目付代ニ而遣ス　酒井伊兵衛
組付録　山下三右衛門
同　鈴木七郎兵衛
年寄組付　沙様六人被差遣
六月六日松川ニ而承聞出候
御先手物頭　中山広太郎
同　楠　七平　同
御徒目付　川上源太郎
同　鈴木又七郎

御使番　　　　　　[illegible]傳馬

大目付　　　　　　柘植宗平

同　　　　　　　　遠藤平八

御寄力

御勘定方

右異国人共江御吟味

御代官

天文方
高橋作左衛門手附

通事

大津濱ヘハ御代官古山善吾并通事吉尾忠次郎一同異人江

公儀へ御たし通之異形之方家ニ

古山善吾

足立左門

吉尾忠次郎

候由ニ而四艘も見へ候趣六月廿日右船中ニ人数濱江上陸
上陸候ニ付ハ一同之事之の事を以御船以〆為御茶好き
さ様ニ而御内意ニ而くまいも梅の方好見へ候由右之大根ニ而赤鶏
十羽遣し出船為致候

一異國一件ニ付　　　公儀へ分さ様ニたし通

一異人金子牧
　内拾牧
常州大津濱ヘ異國人上陸ニ付在城罷在候ニ付
右大根和家ニ十羽渡し
一銀拾牧

御代官　古山善吾

天文方
高橋作左衛門手附
足立左門

以別紙申上候

先年右増山河内守申渡し

去ル廿日御老中大久保加賀守殿宅へ御家老中山備前守罷

出候処左之通御書付被相渡候

水戸殿家老江

常州大津浜江異国船漂着上陸之節番人数差出候ニ付自

領地中山備前守家来も自然領分之者ニおゐても出張備前守初

一家来共ニ骨折候事ニ付

右之通可申聞候

以書付相渡候

一　　　　　　　　　　　　　　中山備前守

大津浜江異国船漂着上陸之節早速人数差出し領分

浦固ニ付　公儀江一分御沙汰之儀御内意ニ被仰付

右之通御達ニ相成候

八月朔日ニおゐて御達左之通

大津浜江異国船漂着上陸之節番人数ニ而取押候ニ付自分固浦備

有候　公儀へも御届ニ不及　其上取計之儀大儀ニ付　尤

先年も年々人数差出し自分領内固も厳重ニ致し候旨ニ付被仰付

候　御内々申上候　御奉行衆

此上被下置候也

御筆之写
今度異船見岸之節守備相勤候ニ付自　公退叢
御褒詞并拙者ニ被為下候而自筆被下候実是
文武二公之御志退之心得誠ニ才力不能之仰せ不忘年之詞
誠武道之令とおもふ老雅之病患ニ而おり兼候迄ニ身を捨候旅
もおそし由人臣之節ニ而候御挨拶と存し不堪感激候而歸为
之今以併安ニ而依揮毫筆論以一同ニ申付也
文政七年甲申七月
右件少者之ニ可ら兼而不申上候ニ付而好候之事之名殊ニ新規繕ニ
右之通ニ而候ニ付当時兼而露之處之候得共難有仕候
公退御識許之次第而御一同可被仰候志ものゝ也

御用掛之旅ニ
去夜異船見岸ニ付自　公退叢
御褒詞并拙者両月不過之被下候ニ付難有一同申付御座候感
存御斜存候依而件也
文政七年甲申七月
右之義者之節ニ付当分之通ニ而候也
公退御識許之次第付
常州大津濱へ異国人上陸之節之者稽古仕候馬ニ而附候処御辞退被為在
取扱元船ニ病人有之候ニ付果実并野菜等類求候處之致
上陸之處右之異人大勢相成候を見以而入用ニ而以而相達ニ付按之

此頃異国船を当方近海の洋中に徘徊する為、渡海帆を揚、吉凶を考、
神々ハ中渡りて上陸し、姦策あしく、国の中に子綱をもうけ、異
吉さかさまに立て、雲耕等果物など持来たり、異国人と通し、勲を横文字に
綴り、渡海帆の旗に表して、此所中そうろう
異国人より渡し書付
我国之法を背き、異国の船ハ皆色々悪事
致し候ハ、速に渡帆可致也
文政七申年異国船之義者、　哀公様御教諭之事
近年異国船西之海より東南之海に至り、類ひ無く来りて沖
中に於て異形を見る、或ハ陸地近く之を寄せ、親しく之様

子を窺ひ、或ハ洋中にて我国之漁人を招き物をあたへて其欲を
つけんとする悪情あるところ也、抑異国之船を一方ならず
之と見る大通横文字を用ゆる法にハ心をまよハすもの多し。や
まとハ何事もみな十字と称する貴び邪宗之者と申なれハ、平
日之形状色楽和らけて愛らしく見ゆるといへとも、其内
心ハ深き毒を含める事なり、第一ハ我国之人民をあやま
りて彼船に近付き、彼ら申し入らるゝ事ハ不測の事
なり、日本ハ
天照大神之神国にして、人倫自ら正直なれハ、性をうまれて
より正しき教なくも事かくる事なし、然るを何まくるしき

あまたのものにいたるまで邪宗に近付神明の罰をかうむる徒
なんぞやむかし南蛮国より吉利支丹の法を以てひろめんとしけるに和
ハ西洋の悪船にのり来りて宝物を交易せしよりだんだん入
て彼ハ邪宗にて日本国を奪んと謀叛をたくみ日本の人民を惑
ハしてきりしたんにしたがふるもの数凡二十八万人に及ぬとかや此是
莫大の人命を失ふ事なれバ是れハ異国船を近づけざるためにて
ひとへによりてなり

東照宮より此のかた　三代将軍家にてその旨を厳しく被仰
邪宗を停止せられて其種類を絶やし給ふより今に至るまで
天下之大禁となりて宗門の改めおこたりなく守りあるへし　猶又是

國交易ハ長崎一所に定まりておらんだの外横文字之国ハ近付ざるを
以て殺害法度なるも決してたゞあんせいの為にさだめし小路なきの
ゆきハきん人禽獣同前にて正しき教も有されハおろしや人の如し
へまたさへひ十字之柱をはりたる所も有りときけとも
天照大神之道にすゝむしよりも決してけからハしきをひろめ人をも
付へし

東照宮以来之國法にそむきて書物ハ申に不及書籍等まで重き刑罰
に行ふ事を弁へるへしもし異國船より渡りし書物又ハ繪図
物之類邪宗の形らしきハ其を投与する事なくて是を改め文庫に
以たとへ其形と心付たらは以て上役へまかり出家之名主に届出

随し相又ハ始りしを出其処へ雷因りたるすハ何時成共速ニ差下可役
人ハ所出るるをむしろに忠節なる國恩を忘まし〱と思れ
けんぽむ肝要なり
名こ役ニ趣候ての役人常ニ無油断相心ケ不念致し候儀
居候よう船を見ても少とも怪敷浮人おみ申すまし候
くのみ人ニ見るニ居抔まりしおしへき事は此節の事なり

文政七申年エゲレス人薩州宝島ニ狼藉之事

松平豊後守殿ゟ月番御老中へ届之写
私領薩摩國七島之内宝島沖へ七月八日白帆之船壱艘漂来端舟
ニ而異國人七人程上陸仕候ニ付役人差越相尋候処言語文字不通候
ニ付船ハ乗戻し翌九日端舟二艘ニ而上陸いたし牛を貰ひ度由手招致
し候得共相断候処手招を以て右島ハ我等之持ニテエゲレス
と申言葉ニ而相分り異菜抔遣し候處元船ゟ乗込ミ又々端舟三
艘ニ而多人数致上陸方々徘徊いたし繫置候牛を足打殺シ外
牛迄集取候ニ付見付候ハゝ鉄炮を向ケしきりニ打かけ元船ゟ石火矢繁く打
放及狼藉候ニ付為目付役地ハ指遣し家来吉村九兵衛と申者鉄炮を
以て異人之内壱人打留候処其余之者共ハ相替り元船ハ逃帰り
翌朝迄之方ハ見え候得共同十一日迄ハ内海沖ニ帆影相見へ候得共十二日後ハ相見
え不申候ヤ不相分候中ニ仍而浦津指越候ニ申遣ハ一組之人数
相付候処ハ指添し其外御沙汰之候まで相締り候座敷ニ申付置候

留メ死骸地方ヘ指送リ次第訳言聞セ右指添長崎ヘ送遣すへき旨
被仰渡候ニ付右ハ当田中五郎国許家来共より中越候ニ付届出候ト云

申
酉八月

文政八酉年二月廿日達
大久保加賀守殿御渡御書付写之事

異国船渡来之節取計方前々より数度被仰出有之ヲロシヤ
船之儀ニ付而ハ文化之度改而相触候次第も候処イキリス之船
先年於長崎及狼藉近年ハ所々ヘ小船ニ而乗寄薪水食料
を乞去年ニ至り候而ハ猥ニ上陸致し或ハ廻船之米穀島方之野牛
等奪取候段追々横行之振舞其上邪宗門ニ勧メ入候致方も相聞旁
難被捨置事ニ候一躰イキリスニ不限南蛮西洋之儀ハ御制禁
邪教之国ニ候間以来何れの浦方ニおゐても異国船乗寄候を見
受候ハヽ其所ニ有合候人夫を以有無ニ不及一図ニ打払逃延
候ハヽ追船等差出ニ不及其分ニ差置若押而上陸致し候ハヽ搦捕又ハ打留候而も不
苦候本船近付居候ハヽ打潰候共時宜次第可致候尤唐朝鮮琉球なとハ
船形人物も可相分候得共阿蘭陀船ハ見分も相成兼可申右等之船
其之御所ニ備立ニ付而ハ其他之意実用当一ニ心掛手寄ニ而御報
又怠慢も無之所々之手段役宜を考談之趣を取計以頭へ申付之
朝鮮琉球なとハ船形人物も一ヽに相分り候得共紅毛船ハ又々
相分兼可申候得共船形一己換而誤候共御察度ハ有之間敷候
二念打払を心掛図を不失様取計候処専要之事ニ候条油断無可

之可申付候

右之趣下ヶ札相納候

右之通相納候可存旨趣候

丙
二月

異国船並ニ漁具或ハ旅海上出合候節向之かし后書多ト見及候
之義のハ中々内実之事情ハ難相分候得共右之通取計方之
迄ニも不相包可相伺中ハ相当之中合無覚束事ニ実有之候
等之儀も有之候を安之旅異国船取締之儀ニ候　仰出候事ニ
相成候而者之ハ彼是之事ニ拘り難取極兼取計方之余期之入
急ニ可申付候

大久保加賀守殿御林伊賀守殿御書付　一野州之海岸ニ書付字
國之廻船漁船共海中異国船ニ出会事
ニ而今般被仰之異国船之出会取計方之
漁民共ニ渡来之而者異国船並ニ出会候節ニも相聞
人気ニ可相成候ニ異国人ニ親之義多隠置候段ニ右等之取計
料可取計出候ニ付一旦国元ニ而相伺候事不
包可申上候

丙
二月

右之趣御ニハ建札等並ニ相触候而下ヶ札相納
右之通相納候可存旨趣候

文政八酉年四月異国船打払之義ニ付御達之事

異船打払之義ニ付此度　公邊より厳重ニ御達し数ヶ所ニ而
此義ハ御国之御法ニ而此迄之武威御示ニ而ハ寛政以後度々御達し有之ニ付
此迄ハ彼船ニ而一統無事ニ而変戦之儀ハ一切無之事ニ候
此度ハ御代ニ被仰出此之ニ至つて熟考有之面々致事之様相成候
打払候節ハ異船ハ速ニ変戦之節ハ早速ニ出張之事
成候ニ付而も可有之哉之様之儀ニ付而者異船見
掛候ハヽ直ニ大砲等打懸ケ此方ニ而事を起し候ハヽ異人遺恨
被存候儀ニ付此国之騒乱を招き候処ニ付而ハ其上異人
此方之義ハ右ニ付候而ハ不容易事ニ候故御国之難義ニ及し候船又者
漢猾船共之通船ニ妨ケ致し候ニ付而ハ拙者共之所存申上候ハヽ天下之
大患ニも相成候義ニ付而者不容易義ニ候　且又
前々より御趣意之義も有之一統兼而之御所存之程を相心得居候儀もあるへし
此等之御心得之趣ヲ御承知有之　右之ニ付何レも異船渡来之節
御領内ニ而者其段御届ケ之上ニ而候ハヽ何れも其元ニ任せ此
方より事を仕掛ケ候義者御国之御趣意ニ背き候儀ニ付異船之上
陸之節者速ニ御届ケ可有之候　公儀ハ此所ニ而何等之義も可有之
条　右之趣ヲ御承知之上ニ而何事も心得違無之様ニ候
拙者共ヘ申越候事ハ直ニ御達し中含可致候事

右之趣之旨被仰達之事

右之者共去年中以来横行致し候ニ付中去卯月より右之者
ハ以乃生涯之段被召出候ニ付被成候歟と存候ニ付
田畑以徳も可有之　去ル五日より段々罷出候に付右之段
之段願ノ召出ニ而候事　候ハヽ
但右之段之義去段被成候ニ付召出可被下
奉存候

右文政八酉年四月十一日ニ達
大久保今助より右之御沙汰之事

右衛門之義去入學出精ニ付被下置金四千両被上納可致
公儀之御用弁も相成候ニ付何角御取計ニ振も有之候ニ付

右加増之義ハ當地之者共ニ百五十人扶持被下置右國ニ而出生之者
之義ハ郷士ニ被召出其外之者共江被下置候事
被成候ニ付出精し
扶持之加増被下置候事　田畑右様之御取計
於人之義去ル
方之子孫代々

文政九年
丙戌九月
大久保今助殿
大関次郎馬
別和左之馬
右書之通相違無之也

中山備前守今
鈴木石見守今
柳原淡路守今
石谷半左衛門
御目付史文淡路守相検ニ
太田備後守文書を以御渡有之居附候写ニ
仰付　諸士之御免有之布衣之御免被仰渡之
候ておもて

仙台大條監物一件

文政十年丁亥冬松平陸奥守斉義卒去セらる未疏月ニ至表
向弘めなかりけれは其時ニ当り松平陸奥守忠成卿息之嫡弟（大膳）

有けるにと後陸奥守大病之由ニ而家督彼之男子ヘ由ニ至り
未幼年ニ付猶ニ虚弱之趣ニ付　公辺ニ而御免ニ
仰付候も陸奥守内室（斉宗女）表向之婚礼ハ未仰之趣ニ付
幼年ニ付内婚礼未相済之由ニ付是迄ニ申合ニ相成
右ニ付来候様申遣シ仙台公ニ相成候處若年ニ
嗣ニ付大條監物儀ニ付即其ニ是ハ上意之由陸奥守
義大病ニハ相成未存生ニ而存生之内ニ在候処
仙台藩中ニ入又彦一之御相談之處ニ付人ト配偶
多とも中候　公辺ハ御序候遂要ニ相成ニ候
と候ても中切なり相済之處ニ付而幼年之主人ニ而

扨新九郎殿のなし給ひし御城跡と云は其塩物なりとも勝に依て沼留と
しるしけるか先年此所代官手に而習仕ける事所に任す迄
浜田村西泉寺出向人ハ怪之云　依て所に於て社寺ナド一同に力
を合日夜之方付寺山西坊神田川川渡村今度相勤けると認なり
それハ支しかるは定めて御法ハ山にある相州きさすが感心し宮す
塩物に定許様ハ何れ程にても候と問ましけれハ一万六千石を取より実
ハ不年石也しかる扨塩物迄なと問ひけれハ家老甲とも迷ふしと問
居かり其多佐渡とかゝしにめとしに浜中め向と問へハ塩物を遣一戸
迷より佐渡扨に能くやかるまの方と数度しける迄ハ塩物此程に
申ちまぬ程有りハ生る迄甲斐さし迷に猿切りと答候事中なり

といへハ佐渡涙をこぼしく流し彼切りハめつて足下に切りよへき様なり切
ハと云しとぞ軽母なるへしとや新かりしも実に結構にと
云ふへし扨るに依て後は塩物を又ハ速にかへわたしける涼風ありてのち
也と申内此時江戸家老に申に其名ハ相州へ云ふとに出入してはける門
意ちしものありけれ共へ迷わさ又一同家老を始め思ふ所合し唐の様
罵詈に迄ひ丈か親類もあらさる也こは間に男の字しるもあるに似
地ある役に目籠けると也大條にて實に和平に快事なる堅く後と
云へし今かはするは記し置ハ偶筆はいふも世の君子ミよ後
ハ事に深く意に留めおくと也　今上を為ず留置村に字留置村字也御座に人格筆して記すと云

文政十二年己丑　正氣堂主人

文政十一子年越後國大地震之事

然ハ飛脚を以一筆啓上仕候先以其元ニ御安泰ニ而御家内様御揃
居家中並ニ當地ニ而も拙者儀も相替候事無之候ニ付
ニすくれし候者先達而当地ハ無事ニ御何事も御座候頭ハ居宅居候
今日候者先文言を御書参候得之依付難有相心得職人共ニ申付候
ニ而今日是迄之所當分大難来り高所ハ先ニ而風聞ニ而も見聞十
二三里横十七八里之場十二日朝五ツ時大地震ニ而所者不残一同ニ潰家ニ相成
倒レ中ニも富家ハ出火ニ相成候ニ付一所ニ而凡家数七千余焼失ニ倒家合
町通迄ハ皆ひとしく天を焦し候ニ而誠ニ目もあてられぬ仕合ニ御座候
相見候私共内弟子ハ無事ニ候得共親類共ニ痛人焼死人等有之

候而無難仕居候所此度当二月頃迄ハ混雑之中ニも相見候得共不残
来ル迄ハ大工木挽共代々職人ニ仕候ハ都而木材買入申候若之私
物入用ニ御座候得共何分當方ニ而ハ居宅も相見候ニ付然し私ハ滞中之人
ニ東川之材木ハ大方来ル三四月中ニハ代金物相済申候然ル処拙者共
難義ニ相成候物価高値之事ニ付先々ニ迄相場を高直ニ付相成難有仕
合ニ候得共先ツハ稼働き申候而何卒よろしく被仰付可被下候
御目出度申上候恐惶謹言

子
十一月十八日　　沼田　乙蔵

江戸
結城屋善蔵様
参り候

右之外私町内四拾軒之内焼死人拾六人又かじ町五拾六軒之内十八人ニ而

町数廿五六町有之内九分死人数不知候由廿才以上無之候由
堀丹波守殿領分越後国蒲原郡之内村々并下田口去月十二日
辰下刻地震ニ而左之通破損有之通
一高札場潰壱ヶ所
一潰家千百四拾三軒
一半潰家三百七拾一軒
一手押家三軒
一潰寺八ヶ所
一潰焼蔵十五戸前
一山崩四拾壱ヶ所
一同大破壱ヶ所
一潰焼家百六拾九軒
一破損家三百廿一軒
一潰寺壱ヶ所
一同半潰四ヶ所
一半潰蔵廿三戸前
一川欠山崩千百間

一江筋潰三千四百七拾五間
一悪水吐樋板損七ヶ所
一田畑壱ヶ所卅六町七反七十歩内三反余
一怪我人二百五十六人内 八十七人男 百七十九人女
一怪我馬七疋
一堤抜潰千三百三拾九間
一道崩千四百卅八間
一即死人四百卅人内 二百十八人男 百廿三人女
一潰死馬拾壱疋
右之外去申年之破損一所之家々并損毛所々并去年并当年之破損等之
右之通御届書開届ニ相済候由承候
子
十二月十九日
十月廿一日志江戸表支配所中東山書面之写之事
和泉院人々内書抜写可有之橋桁下之鶴内有之寺長崎奉

行衛不知候由然ル所先達而難風ニ而唐船損船破損船ニ而和
蘭陀船も被損候由ニ而日本之繪圖其外入候品々取之候橋他
阿蘭陀人ハ被捕候由ニ而長崎通事三人并通詞長
崎奉行所被遣之候折節老中方ニ申参候旨抜一昨日入
牢之　但候由右ハ御側之衆而二人も被捕候由被申付日本之
繪圖ニ一里一分之合圖ニ致し候ニ付委ク此來寺文和蘭陀之
秋之船路其外一々ニ申上
　　公儀ニ而堀田之文之分圖ニ致し候
被成候　公方様ニ而御覽被成候も被為見候御經由其老中ニ
出候ニ付候ニ而被仰付候由右ニ而橋作馬ハ大
坂之与力ニ而相勤候而天文地理ニ被通達し居候ニ付二被

當時之書物等御取上之由今日迄相渡候入牢申候人ニ者御咎
之御座候通申候
右文政十二子年江戸ニ而承候へ共分り兼候得共九月方へ申来リ候由書之

肥前國長崎大風之事

長崎表八月九日風起リ十日津波阿蘭陀船陸へ吹上ケ其地ハ八尺入リて
出島中山ニ而解き中程ニ而悪敷京都ニ而寛年分町方ニ而
家ニ拾万住宅三十万ニ而被下候ニ付其外町人馬も走り
中山住宅を長崎へ為差出候阿蘭陀人ニ而其日まし大工ともニ中谷住
度其内ニ而杉川城米ハ分吹折し大樹皆吹折し中山人死傷人数
其大風地震起り候之出火ニ而三百石の作地皆流人死者百五千人餘有之

埒り来候人も有之、右人数之内ニ而横田里方ニ大荒ニ而亡へく候新荒
ニ而も損御座候而大坂平候趣有之
右段ニ而梅平屋万人斗商家並ニ大坂ゟ積ゟ中山又ハ巳年以後山越
丈夫之儀ニ而凡九分之颶風ハ無之候得共ニ而蘭方之人も怪我人
有之人家ハ半御当用之合物残て有之候ニ付古来ハ御新制
も御相信之事候ハ無難ニ有之右大抵以人家皆之人物浩ニ取中山
不図出来八月廿日十日ゟ地之而ニ出来候当地十日之内分運去者
之六十日内之大風急ニ而水車之儀行届之風ニ当り大時節
ニ而是迄之所ハ秋田も余程荒之候別も荒之中山出之九分之比無
出来之比候別手当ニ而中山

右ハ文政十一子年十月廿一日書状ニ江戸表より申来候写

松平紀伊守殿領分大風之事

私領分去ル九日朝大風雨大汐ニ而田畠不残汐下ニ相成候場所多く一躰
ニ作毛吹損有之堤川除又ハ蔵等押流家中屋敷寺院并町中
在村御普請所損所御殿損処怪我人溺死之者並牛馬等損ニ而其上右風
之中ハ城下ゟ出火数百軒焼失焼死之者も有之御汐ニ而居川居切
流御林木等御損毛一躰ニ家々及飢之者[illegible]綱ニ付屋作毛家も損之
領中御手当ニ而追々相綱も及大変ニ付而ハ此段申上候様[illegible]家
申上度御届仕候

子
八月

松平紀伊守

哀公様御大病ニ付御徳子ヲ以テ江戸表ヘ罷越し候事

松平　将監

一　去十月中金刀山権現ヘ参詣ニ而罷越候折節家蔵度々眼病ニ付
至極ニ付兼而出生之者ニ候江戸表ヘ罷越候ニ付急中上り候ニ付入
御願ニ付急ニ立候　罷越し候　仕出し候
右者将監及家老藩用年寄御用相済候ニ付急度申付候

一　去十月中
哀公様ニ大病ニ付御
御使番中罷越江戸表ヘ罷越候之入ニ付中ニ而古白府ニ而中立候
趣ニ而御様子相伺一条ニ付急し他方御徳子ニ而御統及承候中之事
山野辺兵庫
御家老寛政一ヽ

御座候処ニ而御徳子及承候ハヽ御意ニ相成候ニ付申達候
申上候処右之段御承知被成候得共右之通御取計可被成候
様ニ而御承知ニ而御様子相伺候ニ付不穏ニ付
御手ニ御尋被成候得共御申達候而御承知被成候事
思召御役向御免之大書御取計ニ而候

信義

一
哀公様御大病ニ付御内意承候得共御座候而御他方
御及承江戸表ヘ罷越候ニ付御申上候
御手ニ而右之通申上候御家老江戸表ヘ罷越候
御取計ニ而御出立之御承知ニ而御申上候

戸田銀次郎

御徒目付

一

中之様ニ而有之候所今度旅ト被成候ニ付御役人衆御勤之方相摘之様ニ候
右法令出候江戸表ニ而取扱之者不穏ニ付 以後ハ御村之者ニ而も
御吟味之上急度可相守候事ニ付御役人衆御免之儀ハ右之通り御請申候
右之趣還塞之 御申渡之
御役人衆御免遠塞
遠塞

浅利六之進
菊池彦介
秋山平四郎
吉成十次郎

三木庸之介
戸田源次郎
石川清四郎
今泉恒蔵
菅田忠之丞
岩崎喜之允

小沢軍蔵
馬場猪介
三宅惣之介
高田彦四郎
吉東又馬
増子幸八郎
大嶺大八
大森惣馬
安倉喜八郎
藤井十兵衛

秋山源九郎
池田六之進
川瀬七郎馬
坂場喜介
渡辺安兵衛
野辰忠吉
松本猪介
菅田乙四郎
川瀬卑石
白石又馬

友部正介

途中迄罷下り候処病気ニ付

逼塞

叙又病気ニ付罷帰

武田篤介

照沼 [illegible]

金子孫三郎

蔵人悴
中村 三郎

多田軍次

右者天保元寅二月廿五日御達

敬三郎様御家督之事

去ル十八日

敬三郎様御継　　様

御免被

仰出、　斉之御一字被進　従三位中将御叙任被

仰出　御諱斉昭卿与奉称候処明廿六日従三位ニ被叙候

右之通ニ付廟参并目録献上候様可被相心得候

猶又来ル十二日御礼ニ付猶又献上并目録献上候様相心得

同月当年寄衆ニ出会之

中将様ニ御祝義申上候様ニ相心得候様御同役中ゟ申達可

被相心得候

丑
十二月十一日

右之通御祝儀申上候様ニ申付候事

申達候ニ付達可被相心得候

右文政十二丑十二月内遊

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan